

# 今月の農業情報

尾張

「祖父江ぎんなん」大粒生産に向けて、施肥基準を周知！

とき 平成30年3月10日（土）

ところ 稲沢市祖父江町

「祖父江ぎんなん」の販売実績報告会及び栽培研修会が開催されました。平成29年度は、前年の結実過多の影響により裏年となったことで出荷量が少なくなりました。そこで栽培研修会では、隔年結果防止と大粒のギンナン生産を目的に、農業改良普及課から”大粒ギンナンをつくる施肥の勘所！”と題して、「ギンナンの肥料はどのくらい必要？」のテーマに沿って施肥の重要性を説明しました。また、「祖父江ぎんなん施肥基準」の配布と説明を行いました。生産者から「大粒ギンナンには、施肥が重要！」と意見が出され、理解が深まった様子でした。

来年度、農業改良普及課は、有機物補給のための草生栽培の実証を予定しており、今後も「祖父江ぎんなん」の栽培技術の高位平準化により、ブランド力強化を目指していきます。



【栽培研修会の様子】

知多

女性の力を活かして羽ばたく鶺の味 WAP100 で表彰される

とき 平成30年3月6日（火）

ところ 東京都渋谷区

美浜町の農事組合法人鶺の味が、このたび「農業の未来をつくる女性活躍経営体100選（WAP100）」に選定され、東京都で表彰式が行われました。農業改良普及課は応募書類の作成を支援し、農林水産事務所長が推薦を行いました。

WAP100は、農業界の女性活躍のトレンドを広く世の中に発信することを目的に、女性活躍のモデルとなる取組を選定・表彰するものです。公益社団法人日本農業法人協会が主催しており、“働きたくなる”、“継ぎたくなる”、“渡したくなる”、“始めたくなる”農業経営体を平成27年度から3年かけて全国で102選定しました。愛知県からは平成28年の石川養豚場（半田市）と、今年度の鶺の味（美浜町）の合計2件となりました。

組合長の天木英五氏のもと、年間売上約3億円の鶺の味を支えるのは多くの女性であり、直売や寿司工房で働く地元のパート、組合の役員、正規職員などそれぞれの立場で活躍しています。

東京で開催された表彰式には天木組合長と正職員の女性、加工部門のチーフの女性の3名が出席し、他県の女性活躍を支える先進事例を学んだり、交流を深めました。管内には雇用者の確保に苦心している農業経営体もあるため、今回の情報を模範事例として活用していきます。



【天木組合長と正職員の女性（左）】

と き 平成30年2月21日（水）

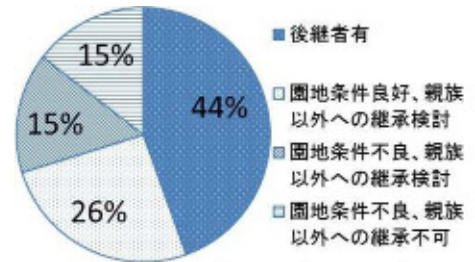
ところ JAあいち中央赤松総合センター（安城市）

JAあいち中央梨生産部会では、高齢化により、ナシ産地の存続が危ぶまれています。そこで、平成28年から「産地活性化プロジェクトチーム」を設置し、対策の検討を行っています。

今年度、50歳以上の会員のうち栽培面積30a以上の27名、計1,141aの園地を対象に園地継承に関する意向調査を実施しました。その結果、後継者がいる農家10戸の園地は508aと全体の44%でした。以下、園地条件が良く、親族以外に継承を検討している農家が7戸293a（26%）、園地条件は不良だが、親族以外に継承を検討する農家が5戸174a（15%）、と調査対象面積の41%が親族以外への園地継承に好意的でした。

この日、行われたプロジェクトチーム会議では、「継承の候補者を増やす方策を考えなければいけない。」「棚の改修が必要なナシ園は、費用負担が大きく、借りた人が大規模改修を行うのは現実的ではない。」といった意見が生産者から活発に出されました。

農業改良普及課は、今後も、産地活性化プロジェクトチームの一員として、この取り組みを支援し、個別相談への対応を行い、円滑な園地継承を推進していきます。



【アンケート対象者の後継者の有無・園地条件・貸出意向】（面積割合）

## 豊田加茂

## 鋤柄雄一氏（養豚）が中日農業賞「特別賞」を受賞！

と き 平成30年3月16日（金）

ところ 中日パレス（名古屋市中区）

豊田市で養豚一貫経営に取り組む鋤柄雄一氏（屋号：トヨタファーム）が中日新聞社主催「第77回中日農業賞」で特別賞を受賞しました。中日農業賞は、昭和19年に始まった歴史ある表彰事業で、平成12年からは中部9県の青年農業者等を顕彰しています。特別賞は、青年農業者に限らず、地域社会の発展に功績があった個人・団体に贈呈されています。

鋤柄氏は、「安心・安全な農畜産物を食卓に届ける」、「農家が誇りをもち、農業に夢を馳せる」を経営理念とし、地域（農業・他産業・消費者）との繋がりを重視した農業経営を実践しています。

現在では、東海地域で最大級の養豚一貫経営（母豚1,000頭）と関連会社を介した多角経営で、高品質な豚肉の生産から販売、農家カフェ等での提供などに取り組み、高所得の経営モデルを確立しています。また、地域農業の活性化のために地域の若手農業者と作目を超えてPR組織『夢農人（ゆめノート）とよた』を立ち上げ、他産業とのコラボや食育活動、地産地消をとおして地域の農畜産物の魅力を広く発信しています。鋤柄氏は、「自身が輝くことで若い世代に農業に夢を抱かせたい」と考えており、今後も地域農業の発展に尽力していく意向です。

農業改良普及課は、都市近郊で営農する強みを活かした経営改善を、今後も支援していきます。



【贈呈式の様子】

と き 平成30年2月15日（木）

ところ 和歌山県果樹試験場うめ研究所

J A愛知東梅部会では、38戸が16haで「玉英」「南高」を中心に10品種を栽培しています。最近では部会員が高齢化しており、管理のゆき届かない園が散見されるようになりました。そのため、省力化につながる栽培技術について学ぶため、和歌山県果樹試験場うめ研究所へ視察研修を実施しました。



【研究員の説明を聞く部会員】

当日は、主に春季摘心処理について説明を受けました。これは、花芽を多く着生させ、さらに、せん定作業の省力化が見込める技術です。また、低樹高化を目的とした一挙切り下げの試験樹や、整枝方法の改善試験や新品種「NK14」に適した仕立て方法の検討試験のほ場についても見学し、部会員は研究員の説明に熱心に耳を傾けていました。視察終了後には、部会長から「春季摘心処理の講習会を実施し、部会全体へ周知していきたい」という声が出るなど、部会を挙げて作業労力削減に取り組んでいく機運が高まりました。

農業改良普及課では、今後も省力化が期待できる技術を推進していくことで、産地振興に取り組んでいきます。

と き 平成29年6月～

ところ 豊川市

蛍光灯の販売中止に伴い、J Aひまわりスプレーマム部会の部会員が開発に協力した電照用LEDランプが急速に普及しつつあります。花芽分化抑制効果のある赤（660nm）と白のLEDを組み合わせた電球型のランプで、消費電力が蛍光灯の約3分の1と小さいことや光源としての安定性などが評価され、今年度からJ Aひまわり資材部で販売されています。

このLEDランプを用い、電照時間を深夜から朝までに延長する（通常深夜4～6時間のところ、朝まで7～9時間）ことで初期生育の向上を狙う「長時間電照」に取り組む農家が急増しています。この技術は、ランプの開発に係わった部会員が農業改良普及課の提案で始め、部会の定例会でその増収効果を紹介したことから試行する部会員が現れ、効果を実感した部会員から口コミでさらに広まってきました。平成30年2月現在、17戸が計1,600球（約160a分）を購入しており、他社製のLEDランプや蛍光灯での実施も含め、10戸が長時間電照を試行中で、さらに数戸が試行を検討しています。

農業改良普及課は、LEDによる新たな電照技術の確立に向け、今後も支援していきます。



【ランプの外観】



【長時間電照で生育の向上したほ場】